

平成州紙



おりおりの記

長岡さんを偲んで

地方自治研究機構会長
元内閣官房副長官

石原 信雄

去る4月2日、長岡實さんが93才の天寿を全うされた。

我々役人仲間にとって、長岡さんの逝去は将に「巨星墜つ」という言葉がぴったりの出来事であった。

昨年長岡さんが三田病院に入院される際、私に見舞いに来るなど云われた言葉が、今にして思えば私に対する訣別の辞であったのではないかと思う。

私が長岡さんにはじめてお目にかかったのは昭和29年で、私は上司の命令で前年の台風で大きな被害を受けた三重県の実情を調査すべく津に行ったときである。当時、長岡さんは県の庶務課長をしておられ、被害の状況や県の財政負担の見通し等について説明して頂いた。その際、県の幹部職員の中で飛び抜けて若い長岡さんが、課員の全面的な支持を受けていること、知事や部長の信頼の厚いことに深い感銘を受けた。

長岡さんは、旧制の府立一中、旧制の一高、東大、大蔵省事務次官と絵に描いたようなエリートコースを歩まれた人であるが、それを相手に感じさせるようなことは全くない人であった。

私は旧自治庁財政局で長い間地方財政の仕事に携わってきたが、国の財政を預る大蔵省の幹部のポストにおられた長岡さんに助けて頂くことが多かった。

長岡さんが役人仲間からも、また、一般人からも信頼され、好かれた所以は、長岡さんの円満な人柄と高い見識、豊かな教養にあったと思う。



長岡さんは、生粋の江戸っ子であった。毎年、12月の末には長岡さんの小学校以来の親友である澤野裕治さん（元日本法制学会理事長）等と一緒に深川不動にお参りし、その後の忘年会で一年を回顧し、時局を論ずるのが私にとって大きな楽しみであった。

長岡さんは、現役を退いた後、日本たばこ産業(株)の社長を務められたが、当時、マスコミでたばこの健康への悪影響が報じられ苦慮されていた。大変なヘビースモーカーであった長岡さんは、「たばこを止めようと思ったが、自分の歳ではもう手遅れだ」といってたばこを続けられた。

最近、公務員に対する世間の評価は芳しくないが、長岡さんのようなさわやかな幹部職員が増えればこの流れが変わるのではないかと思う。